月をながめて

中一　下田光泉

桐の葉落初むる初秋の夕べ何ものかに驚かされて夢は破れた、身体は汗ビッショリに成つてゐる。

後の古い襖にはつてあるサッ筆書が微かな笑みを漏らしてゐるやうに見へる、宵の内に騒がしかつた天井の鼠も今はヒッソリとして隣に寝てゐる友の鼾眠の聲が微かに聞へるばかりで、室内は何となく初秋の薄ら淋しさが漂てゐる。自分は思ひ出したやうに立つて雨戸を開れば水のやうに澄みきつた秋の空には銀河東南より西北に流れ、星は銀砂子を蒔いたるが如く有明の月は鷹取山の中腹にかゝつて扉風を立て連らねたるが如き身延の山や其の間を流れ出づる波木井川長蛇の如き身延の村の死のやうな静かな眠りに落てゐる下界の凡てを明かに照してゐる。

地には優しき松虫騒しき蠻虫の聲もあい

嘘！夜半の身延、夜半の靈山、何と云ふ荘厳さであらう、何と云ふ静けさであらう。自分は二階の欄干にもたれたまゝ悪い夢を見た後の疲れのやうな氣持で眺めてゐたが、今目の前に展開された此の自然の有様を見て何とも云ひしれぬ晴々しい心持にあつた、其時ふと胸に思ひ浮んだのは故郷の事である。

自分の故郷は三方は山に圍はれ、西は海に面した二百箇たらずの一寒村あるのである、自分の家は山と山との間を流れて村の中程を通つてゐるかなり廣い谷川の岸に有つて家には老たる母と病める姉と三毛猫とで都合三人暮しの淋しい家庭である嗚呼今頃はあの南の一番高い山の中腹に有る大きな松の木の有る所に、月が懸つて其の月が谷川の水に寫つて、さゞ奇麗な事であらう、今頃は自分の村や自分の家もこんな静かな〳〵平和の夢を結んでゐるであらう。自分が此に來る時、頭の上から足の爪先まで、老の身もいとはず何から何迄世話をして『シッカリ勉強して歸つてくれ』と双眼に涙さえ浮べて云われた、其時の姿が今目の前にチ

ラつくやうである、あの時もし人目がなかつたなら母の腕に取すがつて思ふぞんぶん泣いて見たかつた。自分が小さい時からよく可愛がつてゐて、此處へ來る時は態々村はづれまで見送つて來てくれた、眉の下に黒子のある人の善さそうな祖母さんわ何うして居られるか知ら、こんな事を思ふてゐる内、何時しかうなだれてゐた顔を冷たい朝風に襲はれて、思はず身振してもたげて見れば、早天には銀河もなく、月もなく宵の明星のみ燦として輝つてゐた。

秋の夕

中三　渡邊泰深

風の息吹もない靜かにくろずむ某る黄昏であるあまりの寂莫にみたされ、何處に行かうと云ふ考へはない、只鼻の向いた方に田舍道をぶらり〳〵歩くのである。そして暮れ行く秋のさびしみと此の胸のさびしみとを同化させまうとした。

山又山の間の黄色の部分は臨終の美を誇る秋草の色である、路端の叢の中には鈴虫が調子細く〻ン〳〵となく聲が種々な秋の虫の聲がする。

何時の間にか、小さい溝の畔の蓼の花や野菊の花が咲いてゐる。

小川の水は減つてゐるが清く澄み、田の稻は風吹く毎にたもたげなる頭を垂れて、見渡す限り一面に黄金の波を漂はせてゐる。

附近の人家よりは、かまどの煙が立ち昇り、白い手拭を姉さん冠りにした乙女や、馬を引いて通る馬子など歸りを急いでゐる。

此の村の小さな工場の瀧笛が響いて、紫紺の空に星の光りが瞬き初めて秋の日は靜かに暮れて行くのである。